資料３

広島市平和文化のまちづくり懇談会

広島のまちを『エコミュージアム』に見立て、『ナラティブ』を紡ぎ出す

2026.7.9

佐々木 亨
（北海道大学名誉教授）

※ホームページでの公表に当たり、著作権に配慮し、引用元の記載を必要に応じて追記・修正しています。

広島平和記念資料館の課題と「広島市平和文化のまちづくり懇談会」の趣旨

- 広島平和記念資料館の来館者は令和７（2025）年度258万人と過去最多を更新。若い世代を始め多くの方々が「ヒロシマの心」に触れる機会が増加している。
- 一方で、館内の混雑により「ヒロシマの心」に触れる一人一人の時間の確保が難しい。受入れそのものが困難になってきている。

- 広島が多くの来広者に平和を発信し続けていくために、どのようなまちづくりを目指すべきか。→　**エコミュージアムに注目**
- 中長期の時間軸に立って、『ヒロシマの心』が来館者にしっかり受け止められ、さらに共感の輪が確実に広がっていくようにするためには、どうあるべきか。→　**ナラティブに注目**

プレゼンの内容

1. 広島平和記念資料館の課題から、「エコミュージアム」の考え方を検討する：「エコミュージアム」の定義・要素・特徴

2. 博物館で来館者が紡ぎ出している「ナラティブ」とは：事例と博物館における意味

エコミュージアムの定義・要素・特徴（文化庁HP，馬場憲一（2026）より）

定義：地域全体を「ミュージアム」と見なし、区市町村が設置する博物館などを「コア」施設とし、そこを拠点に域内に点在する自然・歴史・文化・産業等に関わる史資料の保存、調査・研究、展示、教育普及などの事業を通して、ミュージアム活動に住民の参加と協働を促し、住民が地域の魅力を発見し、住民一人ひとりが学びによってウェルビーイングを実現する場とすることを目的に運営されるミュージアム

要素：対象とする地域内に、

・中核施設（情報・調査研究センター）としての**「コア」**

・自然・文化・産業などの遺産を展示する**「サテライト」**

・新たな発見を見い出す**「ディスカバリートレイル」（発見の小径）**

などを配置し、来訪者が地域社会をより積極的に理解する仕組み



事例：北海道北広島市
北広島エコミュージアム構想

現在の島牧駅逓所
「ディスカバリートレイル」
（発見の小径）の出発点

北海道北広島市エコミュージアムセンター知新の駅HP、「エコミュージアムとは」より引用
https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/kyoiku/detail/00125369.html

旧島松駅逓所（国指定史跡）HPより引用
https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/kyoiku/detail/00007660.html



「コア」：
エコミュージアムセンター知新の駅

「サテライト」：
大曲工業団地
旧島牧駅逓所付近
開拓記念公園　など

「ディスカバリートレイル」：
各サテライトから始まる散策ルート



特徴：

- 行政と住民が一緒に構想し、運営する
- 生活者と来訪者：地域の歴史・文化・生活などを理解して住民が自らを認識する場／来訪者に自らが生活する地域を理解してもらう場
- 自然遺産や文化遺産を保護し、活用を支援する保存の場
- 外部研究機関と協力しながら地域研究に貢献し、その分野の専門家を育成する場
- 将来、想定される地域のさまざまな問題に対し、理解を深める場

エコミュージアムの考え方を活用した課題解決の方向性

（1）被爆に関する遺産の面的な広がりを積極的に活かす。

- **「コア」**：広島平和記念資料館
- **「サテライト」**：本川小学校平和資料館、袋町小学校平和資料館、旧日本銀行広島支店、広島市郷土資料館、広島市現代美術館　など
- **「ディスカバリートレイル」**：各サテライト周辺に存在する被爆建造物・被爆樹木・慰霊碑・記念碑などを結ぶ小径をつくり、発見の「物語」を提示する。

（2）住民参加により、地域社会の発展に寄与

- 住民主体の活動をより発展させることにより、「平和文化のまちづくり」に貢献

プレゼンの内容

1. 広島平和記念資料館の課題から、「エコミュージアム」の考え方を検討する：「エコミュージアム」の定義・要素・特徴

2. 博物館で来館者が紡ぎ出している「ナラティブ」とは：事例と博物館における意味

ナラティブ：「語り手における過去の経験に、あらたなエピソードが加わり、経験が再構成され、意味のある別の物語にしていく行為」「経験を組織化して、意味化する行為」

やまだようこ『ナラティブ研究ー語りの共同生成』（2021）などから引用



雑誌『BRUTUS』2025.2.1号 「特集：通いたくなるミュージアム」

岩井俊二 （映画監督）
いわい・しゅんじ／1963年宮城県生まれ。
テレビドラマやミュージックビデオのディレクターを務め、95年に『Love Letter』で長編映画監督デビュー。最新作は『キリエのうた』（2023年公開）。小説家や音楽家としても活躍。

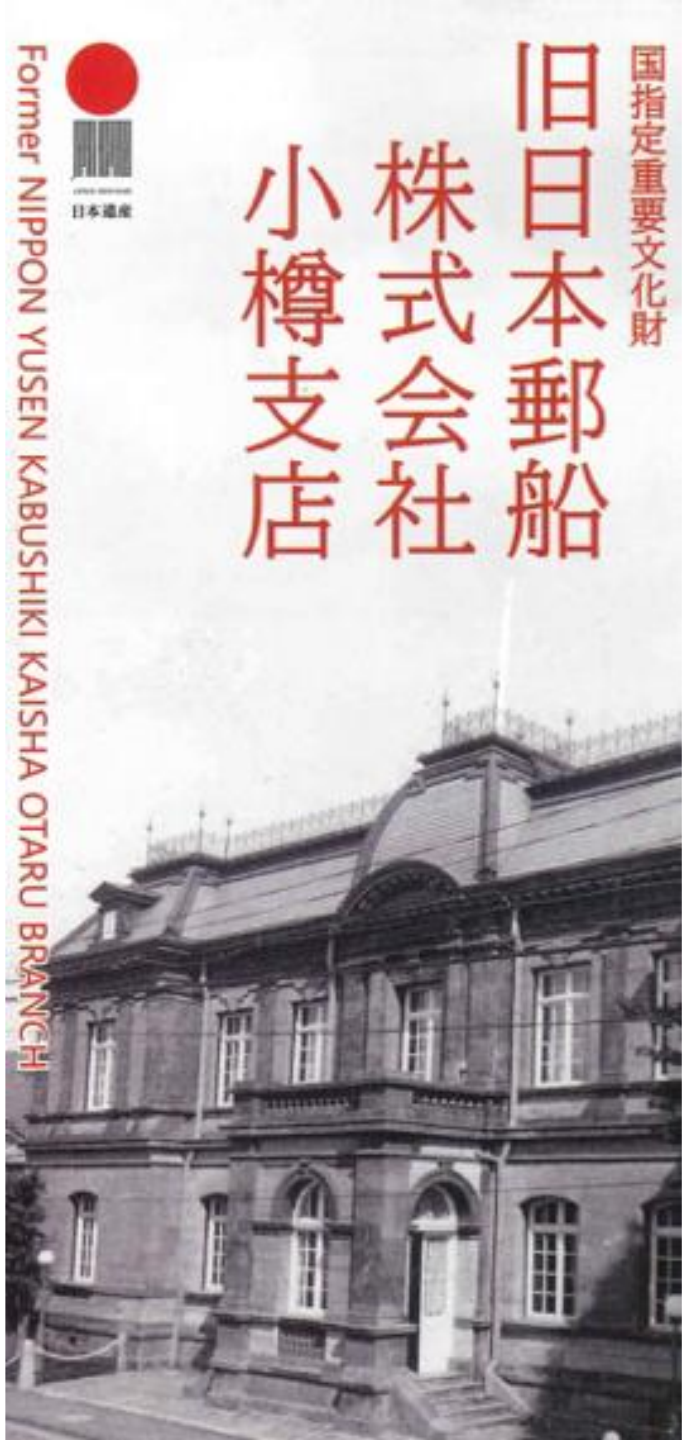
映画公開が一つのゴールではあるが、観た人の解釈によって作品はさらに色づけられる。
「悲喜こもごもに至る非常に抽象的なものを映像で表現するため、それ自体よりも、観た人それぞれの心に残ったものを“作品”と呼びたいし、そうであってほしいと思っています。私が生み出したものが1つでも、1万人が観たら1万通りの作品がある。その機会を得る立場にいるのが幸運すぎることだと感じます。」

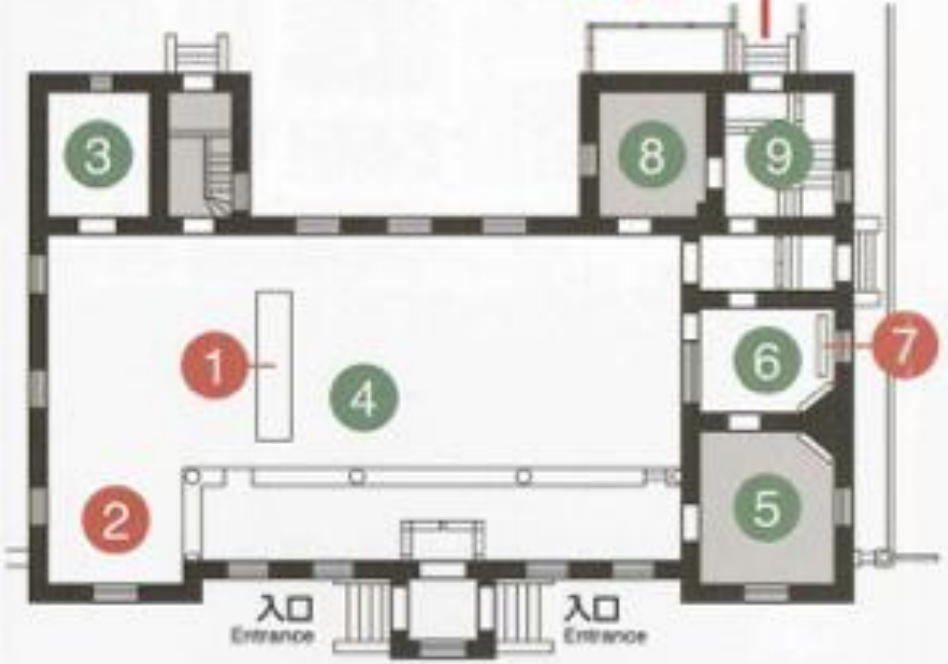
BRUTUSのHPより引用
https://brutus.jp/post-400408/

—

映画そのものよりも、人の心に残ったものを「作品」と呼びたい

今日の デイリ









私の中の「ナラティブ」

1995年 映画「Love Letter」→2022年 広島県立美術館での調査
→2025年 雑誌「BRUTUS」→ 2026年 小樽市総合博物館 勤務

旧日本郵船株式会社小樽支店（国指定重要文化財）のパンフレットより引用

来館者が物語ること

広島県立美術館における
学術コンサルティング委託業務
（2022）

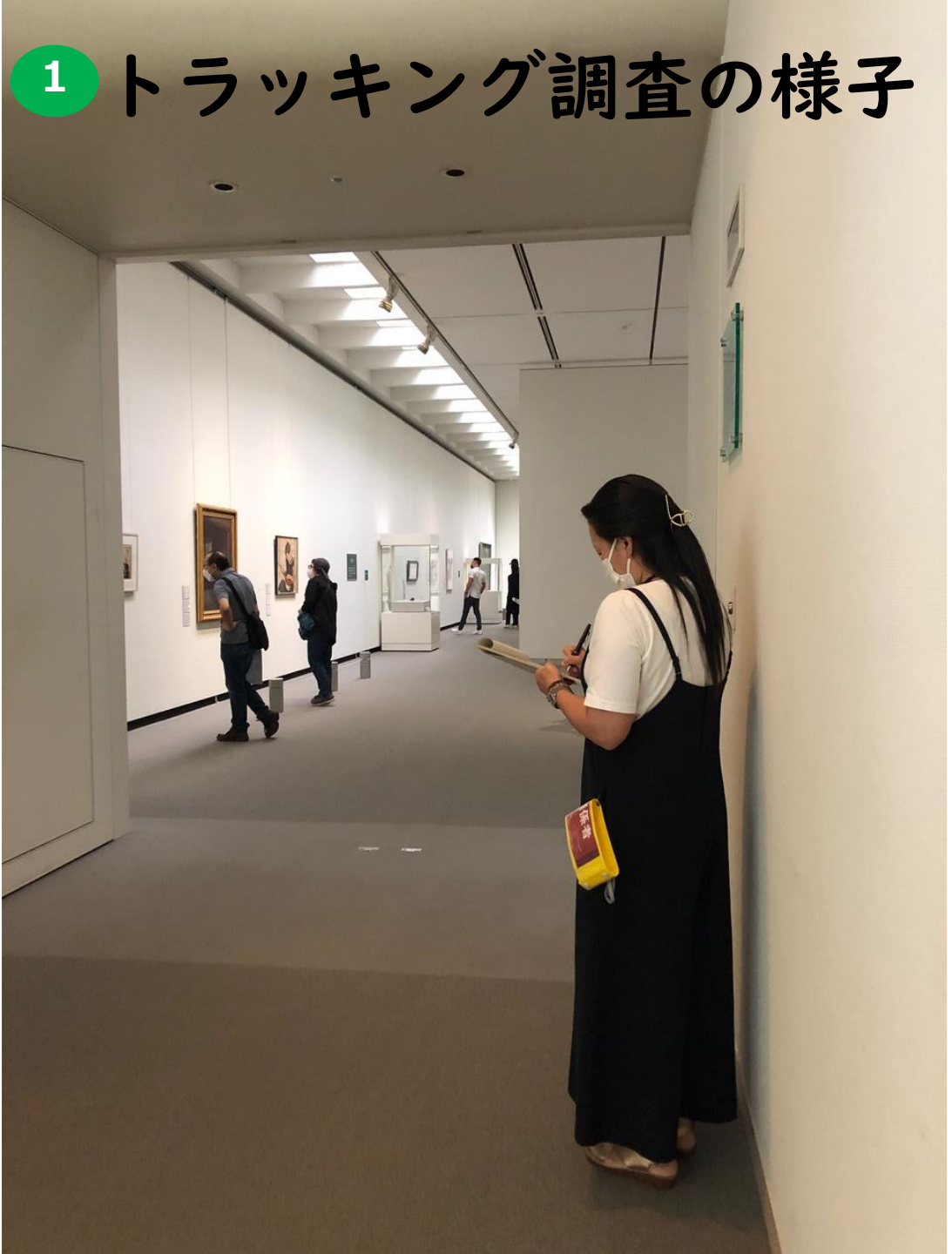
目的：来館者はどんなニーズが満たされることを期待して、ここに来るのかを明らかにする。



＜調査開始前にフォーカス・グループ・インタビューで得た仮説＞

「作家における過去の思い、当時の時代背景をより深く想像し、自分の経験と重ね合わせたいというニーズが存在する」

1 トラッキング調査の様子





2 観覧後のインタビュー

お一人で来館した50歳代女性のナラティブについて、ごく一部を要約して紹介します。

仮説「作家の過去の思い、時代背景を深く想像し、自分の経験と重ね合わせたい」

分類	件数	%
1）想像（背景・過去）　仮説	7	20.0
2）逃避・退避	7	20.0
3）興味・面白さ	5	14.3
4）感動・感情	4	11.4
5）日常の延長	4	11.4
6）手段（自己演出・満足）	3	8.6
7）知識・知的好奇心	2	5.7
8）その他	3	8.6

フォーカス・グループ・インタビューの結果

安野展	SM展	皇室展	
38.4	31.8	35.5	
66.2	42.3	45.1	2
40.5	37.4	39.6	3
80.4	46.0	62.6	1
18.1	10.5	10.8	
0.4	0.4	0.3	
33.0	32.3	34.2	

定量調査（アンケート調査）の結果

来館者の「ナラティブ」を取り上げる「意味」

1. 「ナラティブ」を紡ぎ出すことで、
   来館者が見学したことが「自分ごと化」する。

2. 来館者と博物館との関係がより対等になる。
   → 博物館学芸員は展示などを通して「物語」を表現し、
   来館者一人一人も自分だけの「ナラティブ」を紡ぎ出す。

3. 博物館で来館者が受け取るものは「体験」。
   感性や心的述語の彩られた、感覚や感情に満ちあふれた世界
   → 「真偽」で判断するのではなく、
   「理解可能性／受容可能性」に着目するようになる。

野家啓一（2004）「「二人称の科学」の可能性」『聖路加看護学会誌』８（１）より


2022年6月17日　17:17